

# 一枚の絵

東西線の南行徳駅から

東京の中学に通いはじめた

長男が一枚の絵を

持ち帰った

画用紙に背広の背中ばかりが

描かれている

そのすき間から

こちらを見ている

学生服の少年

「これが僕だ」

と言うのだ

入学して三か月ほどたっていた

球技大会もあったし

校外学習もあった

憧れのテニス部に入って

毎日練習にはげんでいたはず

描くことはほかにもあつたらう

それなのに

通勤ラッシュに

もまれてる自分とは

先生は何を描いても

いいとおっしゃったそうだ

思いもしなかった

一枚の絵

私は何も言えなかった

次の日の朝

お弁当に

たまご焼きを

ひと切れ

多く入れて

持たせた

あの絵は

どこにいったのだろうか

さがしても

家のどこにもない

目をつぶると

背中ばかりの

絵が浮ぶ

そして

絵の中の少年は

今もこちらを

見ているのだ

